III. みる、つくる、かんじる美術体験プログラム | ワークショップ＆レクチャー |

**美術とはなかなか一言では言い表せない。作品を見ることも、何かをつくることも、美術だ。
そしてこの2つを切り離して考えるのではなく、一緒に行うことで、より深い美術体験となる。そのためには心が動くことが一番大切だ。
このような考えから、〈みる、つくる、かんじる〉を柱とした美術体験プログラムとしてのワークショップ＆レクチャーを企画している。**

どなたでもワークショップ
「アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ!」

展覧会を見に来た時に、見るだけでなく、手を動かすという能動的な触覚体験が加わることで、美術館に来た想い出が少し深くなるようにとの思いから、誰でも気軽に参加できるワークショップとして「アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ！」を開催している。プログラムは来てのお楽しみ。さまざまな材料に触ったり、つくったり、描いたりの日替わりだ。材料は、どこにでもあるモノを使う日もあれば、とっておきのモノを使う日もある。材料を家に持って帰りたい、というリクエストには応じない。

本来は展覧会を見に来た人のために開催しているが、フリースペースのため、開館当初はここを目指しての来館者も少なくなかった。開館直後の10時すぎにはもうアトリエの前に並んでいる。そして30分ほど描いたりつくったりした後は、展示を見ずに帰路につく。もともとの趣旨とは違うと思ったが、毎週参加する親子の常連さんは、だんだん、遊びと展示室で作品を見ることを組み合わせた「土曜アトリエ」に参加するようになり、1日プログラムにも参加するようになって、少しずつ美術館が身近になってきている。ワークショップをきっかけに、美術館をより身近に感じてもらいたい。

[凸凹石と積み木っ端]

山や河岸、海岸で集めたさまざまな石。家具や玩具を作る時に出た端材。これらを使って積み木、積み石をして遊ぶ。バランスがとりづらいため、積む行為自体が難しく、集中力とバランス感覚が必要だが、不思議で魅力的な形ができあがる。

[楽描]

テーブルに水性マジックを使って、何でもいいから好きに描く。「本当にやっていいの？」という声もあがるが、描き出したら止まらない。大人も子供もみんなアーティスト。

[カラフル・ミックス・コマをつくろう!]

簡単なコマづくり。白黒だけで描いた模様も、回転すると速度や白黒の割合によって色が変わる不思議なコマ。色とりどりのカッティングシートをコラージュすると、混色されて美しい。

[切って、貼って、カラフル コラージュ]

カッティングシートを好きな形に切って、直接ガラス面に貼っていく。大人もつい真剣に制作してしまう。

[みみをつくろう!]

ピーンと尖った猫の耳、長〜いうさぎの耳、大きなゾウの耳。自分だけの耳をつくった。

[墨は一発できめる]

墨で描くときに下描きはない。息を止めて慎重に、ときには大胆に、筆を走らせる。屏風仕立ての細長い紙に、好きな絵を描いた。

[墨絵本]

垂らしたり、にじませたり、かすらせたりと、墨でいろいろな表情を描きながら、物語を考えて絵本をつくった。

[動物をつくろう! 動物をつくろう! 2]

好きな動物をつくる。さまざまな材料からイメージを膨らませ、つくり方も自分で考える。つくりたい動物はあるけど制作のイメージがわかない人には相談にのるが、考えてつくるのは自分自身。大人も真剣に取り組んで制作に集中した。翌週はpart2。ボール紙に好きな動物を描き、輪郭を切り、立ち上げる。簡単にできる方法なので、たくさんの動物たちができあがった。

[くちばしマスク]

二つ折りのカードに切れ目を入れ、くちばしに見立てて、周りを描く。くちばしの大きさでイメージが広がり、さまざまな鳥ができあがった。

[鳳凰の羽根]

画用紙に好きな色をクレヨンで塗り、その上を黒のクレヨンで真っ黒にする。爪楊枝でひっかきながら模様をあらわす、いわゆるスクラッチの技法。描くのは伝説の不死鳥、鳳凰の羽根。コツコツ、カリカリ、集中した時間が過ぎる。できあがった羽根は周りをカットし、透明ビニールに入れて大事に持ち帰った。

[夏休み紙すきスペシャル]

牛乳パックや包装紙など身近な紙を溶かして、ハガキサイズの紙を手漉きでつくった。他のワークショップで使った色紙テープも、ちぎって並べたり、溶かしてクッキー型に流し込んだり。独自なデザインになり、残暑見舞いにぴったりのハガキに仕上がった。

[まっ黒のすけ]

鉛筆をガリガリ使い、紙をとにかく真っ黒にする。いろいろな方向から線を重ねたり、力いっぱい描き、テカテカになるまで真っ黒に光らせた紙に、練消しゴムを使って好きな形を消し取りながら描く。指先も真っ黒になりながら、作品が完成した。

[パクパク絵本]

パクパク・カード（開けたり閉じたりすると、口がパクパク動くように見えるカード）をじっくり見比べ、何に見えるか想像しながら1枚、そして色紙も1枚選ぶ。色や形を描き足し、色紙を貼って完成。

[パラパラしてみる?]

少しずつ形を変えて1枚ずつ丁寧に描き、1×5cmサイズのパラパラ漫画をつくった。

[糸を刷る?]

糸に絵の具を塗って紙にはさみ、色と形を写し取る。偶然できる糸の表情に、開いた時は驚きの声があがった。その後、色鉛筆でステキなカードに仕上げた。

[翼をください]

色とりどりのカラーテープを使って翼をつくる。制作はとっても簡単だが、つくりだすとその人なりのこだわりが出る。2時間近くもの間、黙々と制作する姿も見られた。できあがった翼を付けるとみんな大満足。

[とんとんステンシル]

星とハートの形を切り抜いて、ステンシルを行う。自分でつくった星型とハート型に、他の人がつくった型も組み合わせ、色とりどりのカードをつくった。

[しっぽをつくる]

カラーテープでしっぽをつくった。小さな子供はすっかりご機嫌になり、そのまま付けて帰った。

[水のゆらめき]

コレクション展示室に展示されている福田平八郎の「水」は、絶えず表情を変える水面を表現している。透明板に作品が印刷されたアート・ペーパーを使って、この作品から新しい水面のゆらめきを探してつくる。重ね具合をあれこれ試して、自分のゆらめきを探した。

[パフェを作ろう ○○スペシャル]

おいしそうな材料をバイキング形式で自由にとり、パフェをつくる。このパフェづくりは、大人が一人で集中して制作する姿が多く見られた。

[カラみの]

全身を覆うようにカラーテープを結びながら、ミノムシのような外套をつくった。ガサガサとカラーテープに潜る様もまるでミノムシ?大人も真剣につくった。

[しももんを作ろう!]

見えないけれど、そこにいる。フィンガーペインティングで、不思議な生物“しももん”を想像してつくった。指で描くのは気持ちいい、という感想が多かった。

[ごちそうプレート]

思った形、好きな形に紙を切り、切り込みを入れてお皿をつくる。模様を描いた後、バイキング形式の素材コーナーから、料理を考えながら盛り付けしておいしそうなごちそうをつくった。

[さよなら、ひつじくん]

2015年ひつじ年最後のワークショップ。ふわふわ、モフモフ、気持ちいいメリノウールをアトリエ全面にまき散らし、たっぷり戯れて遊んだ。そして好きな色のウールを混ぜて持ち帰った。

[そうね、だいたいね♪]

紙管、カラーテープ、色鉛筆、そして白い紙で、カラフルな時計をつくった。時計針は何時を指すかにこだわり、慎重に制作。大人もはまったワークショップだった。

[ふりふりスティック]

ビニール袋にカラーテープをちぎって入れる。制作は手だけでハサミなどは使わない。ポイントは、どのようにちぎるか。なるべく細かく? 丸める? 結ぶ? 蛇みたいなのをつくる? どのくらいの量を詰めるかによって、振った時のカラーテープの動き方が変わる。パンパンに詰めた方がいいか、少なくしてフワフワさせるか。好みで周りにカッティングシートを貼り、紐を付けてできあがり。

[フリッパー]

振ると音がする人形「フリッパー」。2つの紙コップをどう組合せて重ねるかがポイント。大人から子供まで、それぞれのフリッパーを真剣に熱中してつくった。

みんなの土曜アトリエ
体験から鑑賞まで

「楽しい」「すごい」「面白い」と時間を忘れて夢中になったことは、人の記憶として身体の奥に刻み込まれる。みんなで同じ時間と場所を共有しながら、新しい自分を発見するきっかけ作りは重要だ。「みんなの土曜アトリエ」は、身体と感覚を活性化する遊びと、コレクション作品を視ることを組み合せた美術体験ワークショップである。未就学児から一般参加者までそれぞれの視点で楽しめる、大分県立美術館ならではの人気プログラムだ。

前半の体験プログラムでは、遊びを通して身体と感覚を活性化させていく。色、形、素材から空間までをもテーマにしたダイナミックな活動で身体も心も喜んだら、美術館のコレクション展示室に行き、数点を一緒に見る。リラックスした身体と目覚めた感覚で見るコレクション作品は、より感覚的に色彩や素材をとらえることになる。子供は全身で楽しさを表現し、昔子供だった大人は忘れていた感覚を思い出す。誰かと一緒に展示室に行くことも新鮮な体験となる。全身で感じる、見る、を繰り返し、美術に親しみながら自身の視点を築いていく。将来的には一人で美術館を楽しむ姿が増えてほしい。

［ ふわもこ・ふわもこギャラクシー ］

直径8mの巨大な布。広げただけで空気をはらみ膨れ上がる。バサバサ揺らした布の上を歩く。転がる。全員の呼吸を合わせて上下させ、中に空気を入れると大きな卵のできあがり。膨らむ形に体当たりし、下に潜り込む。「ふわもこ」は子供も大人も一緒になって興奮するワークショップだ。

「ふわもこ」をした後に、宇宙の映像を投影するのが「ふわもこギャラクシー」。布の中はまるでプラネタリウムのような空間になる。コレクション展示室では、月に注目して作品を見た。

［ カラフル・インスタレーション ］

2人ペアになってカラーテープを転がす。うまく届く場合もあるが、途中で止まったり、全然違う方向に転がることもしばしば。天井から吊るし、空間一帯に張り巡らせると、あっという間に部屋中に色が広がった。

［ ぱたふわ ］

半紙を床と平行に持ち、そっと手を放す。ロール障子紙を繋げたものを数人で持ち、そっと手を放す。右に左にゆらゆら、ふわふわ舞い落ちる紙。団扇でばたばたあおぐと床から浮き上がる。周りから、一方向から。あおぎ方を変えると、まるで魔法のじゅうたんのように飛びまわる。

三種の神器でめぐるギャラリーツアー

実体顕微鏡、双眼鏡、聴診器という「三種の神器」を持って館内やコレクション展示室を巡るツアー。「実体顕微鏡」は20倍の世界を見ることができる。指紋の凹凸や皮膚、爪の肌理などを見ると自分の身体の一部とは思えない。美術館の床や壁を見ると、さまざまな素材やテクスチャーを発見できる。触った触感と見た質感を自分の中で比べてみる。距離が変わると見える世界が異なることを想像しやすくなる。さらにその視覚を手助けするのが「双眼鏡」。肉眼では気づかなかった世界に迫ることができる。では「聴診器」は何に使うのか。聴かれたことはあっても聴いたことは少ない自分の心臓の音を聴くことから始める。喉にあて深呼吸をすると、身体の中を風が通り抜ける音がする。呼吸の強弱で音が自由に変えられるため、新鮮な体験と感じる人は少なくない。テーブル、椅子、そして壁や床に聴診器をあてて周りを軽く叩いてみる。素材や構造の違いで音の伝導が異なり、意外な音が聞こえてくる。もちろん展示室で作品を叩いて音を聞くことはしないが、素材に対してイメージを広げることがここでは重要だ。普段は意識することの少ない感覚を再認識することで、作品を見た時にイメージを膨らませられる柔軟な身体と感覚を手に入れることができる。

今日は積むぜ！

OPAM教育普及グループのオリジナル・トイ。「積み石」は県内の山、川、海から集めた色とりどりの凸凹石で、思わず集中するバランス積み石。「積み木っ端」は主に家具と額縁の端材。「積み竹」はスライスした竹を積層した。そして大量の紙コップ。積む系のモノを使い放題で遊ぶ。展示室では石をテーマに作品を見る。天庭にある3種類の作品の材料は？ 岩澤重夫の「白韻」に描かれているのは？ さっき遊んだ凸凹石と比べたら？ 作品と離れて、近寄って、を繰り返し、全体の印象からディテールまで丁寧に見た。

私の身体が宙に浮く

大きな紙に寝転び、身体の形をトレース。その紙をみんなで持ってフワッと浮かせたり、天井から吊るして同じポーズでゴロゴロしたり。その後、コレクション展示室へ身体が描かれた作品を見に行った。

身体で視る建築ツアー

しゃがんだり、寝転がったり、視点を変える。触ってテクスチャーや温度を確かめる。見て説明を聞く解説型ではないツアー。三種の神器を使う。

七夕ギャラクシー

風船にミラーシートを貼り、懐中電灯で照らすと、キラキラと光の影が踊る。ロール障子紙にのせてピンポン玉と一緒に揺らすと、光と影が交じった様子に歓声が上がる。キラキラの風船を転がして天の川に見立てた。

コロコロピンポン

次から次へとまき散らされるピンポン玉。約3000個のピンポン玉と戯れたワークショップ。心身ともにリラックスした後に、コレクション展示室へ行く。

カオカオミュージアム

顔を練白粉で真っ白にする。コレクション展示室に行き、作品と同じポーズや表情をして、絵の世界に加わる。とにかくよく作品を視るための一つの方法として行っているワークショップで、大人から子供まで人気のプログラムだ。白塗りすることにより、普段とは違った感覚（変身願望など）に目覚め、人の匿名性が強調され、表情の変化、しわのより方や筋肉の動きなどがあらわになる。同じ表情をするためには、首の傾きや身体の方向、重心、描かれている人物の心情をも、作品全体の印象から推測する。OPAM以外では体験できない新しい鑑賞ワークショップで、楽しみながら作品を視る決定版。

星ふってごろごろ

黒い紙をギザギザの星形に切り抜き、そこに懐中電灯を照らすと、切り抜いた形が映る。全員の紙をつなげて美術館の照明で照らしてみると、たくさんの星がピカピカ降り注いだ。

魔法のホウキで空を飛ぶ

紙管とカラーテープを使って、自分だけの魔法のホウキを制作。またがってジャンプした瞬間の写真を撮ると、まるで美術館の中を飛んでいるようだ。1Fのマルセル・ワンダース氏の作品の前、そして3Fの天庭で連続撮影。撮った写真をみんなで見ると、魔法のホウキで館内を飛び回る姿に歓声があがった。

サポーター活動と研修

教育普及のサポーター・ワークショップ・グループは「一緒に参加する」という視点で活動している。ワークショップでは将来的に独自のプログラムが企画できるようになればと考えているが、それには自らの身体と感覚を意識しなければならない。そのために、美術家が表現した光の作品を見ながら身近な光について考える『光のゆくえ』、コレクション展示室で、目隠しする人・作品を言葉で説明する人・その様子を見ている人という3つの視点で作品を見る『すてきな三人組』などの研修会を、月1回行っている。また教材ボックス「ストーン・ボックス」に県内の石・土からつくる顔料1万色を入れる予定で、その制作を週1回行っている。

「陰影礼賛 龍虎図屏風を火皿で視る」

OPAMに展示された高精細複製「龍虎図屏風」を、描かれた当時の陰影を想像しながら視たワークショップ。七島イの畳を敷いて屏風の前に座り、離れたり近づいたり。ロウソクや菜種油で火を灯して江戸時代の光を想像し、暗順応による人間の眼の能力についても再認識した。

特別ワークショップ ＆ レクチャー

「アトリエ・ミュージアム みんなでつくろっ！」の来館者が美術に親しみ、「みんなの土曜アトリエ」の参加者が視ることを取り入れた美術体験を楽しむ。その次は小学校や中学校、そして個人ではなかなかできないことをやりたいと考えた。それは長時間集中して取り組む活動やダイナミックな活動、専門的な活動だ。

子供のコースでは学年を超えて、普段では触らないような素材や道具をたっぷり使う。中学生や高校生以上一般のコースでは、専門的な素材や技術を知りながら美術の多様性に触れることや、身体の可能性に迫る企画もしている。どのコースも基本的にはワークショップの中でコレクション展示室に行き、素材や技術、色彩、形態、構図あるいはイメージや雰囲気など、さまざまな切り口で作品を視ることが含まれる。さらに企画展に関連した講座では、出品作家を講師に招いたり、制作の内容をダイレクトに展示作品と関連付けるなど、美術館ならではの企画を次々開催している。「応募の時は長いと思ったから迷ったけど、まだまだ時間が足りない」「実際に描いたからか、今までこんなによく作品を見たことなどなかった」「今度はいつやるの？」などの感想が寄せられている。普段の生活とは切り離された集中した時間の中、充実感や達成感が生まれる。興味が尽きることはない。

[OPAMワンダーランド～大型絵本のびっくり箱]

10:30～16:30という長い時間、そして3日間連続のワークショップ。参加したのは小学1年生から6年生まで、16名の元気な子供たち。初日は美術館内のコレクション展示室で即興のお話をつくり、ポーズをとって写真を撮る。そこから物語を広げ、登場人物も設定。衣装や小道具をつくる。2日目は登場人物になりきるためメイクを行い、物語に合わせてさまざまなポーズをとりながら撮影した。そしていよいよ最終日。撮影した写真をもとに絵本にして、大型絵本を仕上げた。しかも形は飛び出す絵本。ページを開いての発表会では、大いに歓声が上がった。

[キラキラ ☆ 手作り天の川]

(七夕スターライトエクスプレス関連ワークショップ)

OPAMと向かい合う「iichiko総合文化センター」のエントランス「iichikoアトリウムプラザ」で、キラキラ光るミラーボールをたくさんつくるワークショップを開催した。制作は風船にミラーシートを切って貼るだけだ。B1F「県民ギャラリー」を真っ暗にして、天井から吊るしたり、揺らして懐中電灯で照らしたり、ロール障子紙をつなげた巨大な紙の上を転がして下から見たり。4～6歳の子供たちを中心に、延べ123名もの参加者が光り輝く手作り天の川に熱中した。

[とっておきのマラカイト～緑を描く、緑で描く]

マラカイト（孔雀石）原石から顔料をつくり、絵の具にしてドローイングまで行う専門的な講座を開催した。今回砕く原石を紹介すると、「本当に砕いちゃうの？」という、驚きと期待混じりの参加者たち。ハンマーをふるって砕いた後は、乳鉢ですりつぶし、茶漉しと#300の紗幕に通し、粒子を整えた。粗いものと細かいものを分けて電熱器で焼き、色味を変えて顔料をつくった。このマラカイトの顔料に4つの展色材を使った色見本をつくり、その後、緑がモチーフとなる思い思いの絵を描いた。

[てくてく参拝。わたしのお願い運んでね]

(「神々の黄昏」展 関連ワークショップ)

つくった人形に願いを託して宇佐神宮の神様へ届けるワークショップ。境内で人形を少しずつ動かし、カメラで撮影。参拝する人形たちのコマ撮りアニメーションを制作した。神社の雰囲気を肌で感じ、祈りの文化や地元の神社の歴史を体感した。

[箱展]

(利岡コレクション＋大分アジア彫刻展「身も心も！現代アートに恋い焦がれて」展 関連ワークショップ)

展示作品と同じ画像を小さくして用意。好きな作品、印象に残った作品を集め、箱の中にレイアウトして、自分の展覧会をつくった。箱庭のような展覧会なので、箱展と名付ける。難解と思われがちな現代美術の作品に親しむワークショップとなった。

[水彩画法事始め]

手軽さだけではない水彩画の魅力に迫るワークショップ。にじみ、ぼかし、色の重ね具合など、さまざまな水彩絵の具の使い方を試しながら、展示室で福田平八郎のスケッチも見た。各自で制作した後、最後にもう一度、みんなで展示室に行く。作品の持つ雰囲気や印象とともに、ディテールや描き方も興味深く見るようになった。描くだけでなく、見る視点が広がるワークショップになった。

[鉛筆画を極める？ 触ることからはじめよう]

鉛筆には10Hから10Bまで22種類の濃さがあり、芯の濃さや鉛筆の持ち方、筆圧を変えると、さまざまな表現が可能になる。線を重ねる、削った芯を直接画面にすりつける、画面を真っ黒にしてから練り消しゴムで消しながら描くなど、いくつかの方法を試してから作品を描いた。最後にコレクション展示室へ。手を動かした後に作品を見ると、今まで気づかなかった絵の具の表情や形の取り方などに、自然と注目して作品を“視る”ことになった。

[ぴょんこる　うさぎのダンス・スーツ]

10m四方の布をふわふわさせて、その上を転がったり飛び跳ねたり。下に潜り込み、月の映像を投影すると一斉に歓声が上がった。うさぎスーツは不織布の上に寝転んで型紙をとり、ぴったり自分サイズにつくる。耳を立たせて尻尾を付けて、アクセサリーやニンジンもつくった。最後に完成したスーツを装着し、とっておきのジャンプをした。

連続レクチャー

教材ボックスをめぐる7つのお話

教材ボックスは、大分県を美術的視点で見ることにより、感性を刺激するとともに、モノを視る眼や好奇心をより触発していきたいとの思いから制作した。その内容と詳細は、主に「夜のおとなの金曜講座」で紹介している。制作にはさまざまな分野の多くの方から助言・協力をいただいた。そこでこれらの方々をお招きして、大分の自然、風土、環境、歴史、文化について、より専門的なお話を聞く連続講座を開催した。

其の一
大分ふるさと自然史
地面の下は宝箱
講師：野田雅之（理学博士）

大分県内を徹底的に歩いて鉱物・化石を調査研究した野田雅之氏による、大分県の地質の話。「犬も歩けば棒に当たる」との思いで歩き回ったという豊富な経験と実行力の持ち主、野田氏の話は尽きることがない。専門的な話に熱心に耳を傾ける参加者だった。豊後大野市歴史民俗資料館より借用した氏のコレクションは見応えがあり、貴重で美しい鉱物たちから目を離せなかった。

其の二
ふるさと大分
世間遺産
講師：藤田洋三（写真家）

「手で考え、足で思う」を信条に行動するという藤田洋三氏。「人の手と息がかかっているものは美しい」という話で始まり、「美しく崩れていくのが美しい」「歴史には残らないが物語に残る」ということで自ら「世間遺産」と命名しているものの写真、そして表面を見ただけではわからない物語があるという鏝絵の写真を、時間の限り紹介してもらった。

其の三
とっておきの臼杵磨崖仏
祈りの里、臼杵
講師：神田高士
（臼杵市文化・文化財課 文化財研究室長）

日本人は古来よりどう色彩をとらえてきたのか。臼杵磨崖仏が作られた時代の日本人の色彩感と磨崖仏の色彩の話、臼杵磨崖仏は浄土をこの世に作る立体曼荼羅であり、900年前のテーマパークだった、という神田高士氏の話はとても興味深かった。春分の日には日の出の太陽が臼杵磨崖仏を照らすという。これを見逃すまいと思った参加者は少なくない。

其の四
壁を語る
色とテクスチャー
土の力に触れて
講師：原田進（原田左研 親方）

土と漆喰にこだわり、日田周辺の土を採集して独自の壁を制作する、左官職人・原田進氏による漆喰壁と土壁の話。壁をつくるための素材や道具などの実物資料を見ながら行われた。日田をはじめ、いろいろな場所の土を混ぜた壁見本は、ルーペで見るとどんな素材が混ざっているかもよくわかり、興味深かった。これから行く先々で見かける土や壁が気になりそうだ。

其の五
国東の色、宇佐の色
文化財科学の視点から
講師：稗田優生
（大分県立歴史博物館 学芸員）

蛍光X線分析装置を使っての色彩研究はとても興味深い。県立歴史博物館から稗田優生学芸員を迎え、文化財科学の視点から色の話を聞いた。取り上げたのは、富貴寺大堂の壁画の色、宇佐神宮神輿障子絵の色、そして鬼会面や仏像彫刻の色。教材ボックスの中の鉱物も一つずつ化学元素を検証した。辰砂？と期待していた石からは水銀反応が出ず、黄鉄鉱に近いと思っていたモノからヒ素の反応が見られた。大人が興奮しながら測定結果を待つ姿が見られる貴重な講座となった。

其の六
布・伝統から生まれる
技術と素材
講師：須藤玲子
（テキスタイルデザイナー・「NUNO」代表）

手業や伝統的な染織技術と現代の先端技術を融合させて、新しい布を次々と生み出していく須藤玲子氏。奄美大島から山形県まで、日本各地の産地ごとに分類したNUNOの布づくりの話と、2011年からスタートした無印良品「FOUND MUJI 日本の布」で沖縄から新潟まで30か所回った記録の話。登場した布を持って来ていただき、実際に触って感じることができた、充実感あふれるレクチャーとなった。

其の七
教材ボックスは
美術・絵の具の宝箱？
講師：森田恒之（博物学者）

日本万国博覧会（大阪万博）、埼玉県立博物館、東京都美術館、国立民族学博物館で、保存・修復、教育普及に関わった博物学全般のスペシャリスト森田恒之氏。顔料をリンシードオイルで練ると透明度が増す油絵の具。その塗り方について、材料、道具、歴史を交えての話は、高校生にもわかりやすく、かつ専門的なレクチャーとなった。そして今後、教材ボックスでは、身近なモノからつくる油絵の具による色彩見本の制作という、具体的な目標が見えてきた。

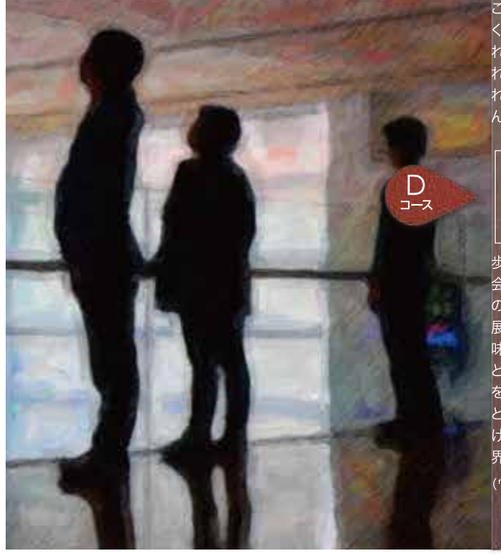
身体のワークショップ
ワタシと向き合う

人間は未知なる可能性にあふれた身体と感覚を持っている。にもかかわらず、ケガをした時や病気になった時は身体に思いを巡らすが、健康な時ほどその存在は忘れがちである。生きていく中、自らの身体と感覚は重要だ。身体と感覚を常に意識すれば、きっと毎日が生き生きする。そして身体と感覚を意識する、あるいは身体と感覚を活性化させることで、能動的な視点を持てるようになる。

そのことを再確認するため、「身体のワークショップ」を企画した。講師には舞踏家の菊地びよ氏を招聘。彼女は「地面の下には何らかの誰かが住んでいた」「命はそういう場所にしか生きていけない」「何かの命がなくならなければ次の命は生きられない、なるべくそれを思い出したい」から私は踊る、と言っている。体感したものが身体に染みこむという感覚を意識する。体感したことで生きていくリアリティが強くなったワークショップだった。

菊地びよ ◎舞踏家

自身の独舞、他ダンサーやミュージシャンとのコラボレーションなど、表現活動を行う。「体話舎」を主宰し、自分自身と静かに向き合い、心地よい身体を見つけ、そこから周囲とも心地よく対話していくこと、身体を開いていくことを目指している。



A コース

からだの大黒柱

身体はまさに動く建築物。身体の大黒柱である背骨、そして動きの要となる腰を意識して、自分の存在を再確認した。「こんなにも自分の身体のことをわかっていない、ということがわかった」「自分の身体を客観的に見ることができた」「身体や背骨を意識したりリラックスするのは難しいけど、添えて触れてもらうだけでできた」という参加者たちだった。

B コース

身体と建築
OPAMとワタシの身体

目をつむり、身体のあちこちを触る。呼吸を意識する。遠くの空間とワタシの身体を意識して美術館の建築空間に佇む。心地良い呼吸と空間を感じ、自分の場所を見つける。「目線を変えたりして、天井の美しさや質感、床の硬さを味わうことができた」「大人になってから味わったことのない感覚を思い出し、取り戻した」「新鮮で、知っているようで知らない身体だった」「空間に対しての一体。全部自分なんだ。そのことひとつで世界が広がった」「ワタシってすごい宇宙の一部」などの感想が生まれた。

C コース

からだの土台
毎日が大切なワタシの身体

足が地球の中心とつながっていることを意識する。地面を感じて歩く。いろんな生き物がいるかも知れない。地球に、重力に引っ張られている。指先が地面に引っ張られる。重さと柔らかさを一緒に。そんなイメージを持って歩いた。

D コース

身体がここに在る
そして絵の前で佇む

歩くとともに呼吸を意識し、出会った身体と距離を感じる。身体の密度を意識する。コレクション展示室で作品を1点選び、身体で味わう。「意識するとは、そのものと一体感を持つこと。絵と一体感を得ようとして、初めて絵を見ることができている。自分の世界を広げようと思っていたけど、実は世界と一つになっていくことだった」

（ワークショップ終了後の参加者の感想）

身体のワークショップ
バンブー・ボディ

郊外に目を向けると、多くの竹を目にする。日常のすぐ隣にある竹。しかしことさら竹を意識することは、多くないのではないだろうか。身近な存在であるにもかかわらず、特別に意識しない。これは自身の身体と似ている。身体のワークショップ第2弾は、身体と竹の出会い。OPAM教育普及オリジナル・トイ「たけぴょん」と「りんこちゃん」を、身体と空間を結びつける素材として使い、新しい視点を生み出すワークショップを開催した。

86B210

鈴木富美恵、井口桂子によるコンテンポラリーダンスカンパニー。1995年に結成以来国内外で活躍。アクロバティックな動きや何気ない動作の中に、さまざまなジャンルの音楽や映像、光の効果を取り入れた表現は、ドイツ、フランスでの評価も高い。スタジオ「呼応」を運営し、身体を動かすのが苦手な人からダンステクニックを学びたい人までが訪れている。

呼応する身体
はじめの一歩

はじめはたっぷり時間をかけて呼吸を意識しながらのストレッチ。少しずつ、身体の隅々まで意識を巡らせていく。そして「たけぴょん」と「りんこちゃん」をじっくり触る。「たけぴょん」はその名のとおり、端を持つとぴょんぴょん揺れ、思ったよりもしなやかに曲がる。指先をはじめ身体のどこかでバランスをとって歩いたり、床に打ち付けて音を鳴らした。「りんこちゃん」もしなやかに揺れ、ぐるんぐるん回すと空間がダイナミックになった。少しずつ身体と感覚を活性化していった。

呼応する身体
その先へ

午後からの参加者を加えて身体のウォーミングアップ。照明で光の輪を作り、その上を見上げる。ただそれだけで光が身体にじっくり染みこむようで、これからのワークショップを予感させた。その後3人一組になり、「たけぴょん」を組み合わせて5つのオブジェを作った。「舟をこぐ」「猫になる」「横になって入り、回って出る」「高圧線でビリビリ」「布を被せてスリスリ」と、それぞれのオブジェに動きのモチーフが与えられ、その動きを試す。さらに5つのオブジェを合体させて2つにしたものを天井から吊るし、映像も加えた。最後はその中で2グループに分かれ、「りんこちゃん」で音を出すチームと踊るグループに分かれた即興空間を作った。

「たけぴょん」と「りんこちゃん」

OPAM教育普及オリジナル・トイ。「たけぴょん」は、端を持つとぴょんぴょん揺れることから命名。長さ約180cm、幅5cm～2cm。先が2つ・3つに分かれているもの、両サイドが2つ・3つに分かれているもの、3カ所に穴の開いているものなど7種類がある。「りんこちゃん」は、アトリウムに展示している須藤玲子氏の作品から着想を得た。直径約160cm、90cm、45cmと3種類の輪弧編（りんこあみ）でできている。いずれも遊び方、使い方は特に決まっていない。

開幕展関連
ワークショップ＆レクチャー

OPAM開幕展「開館記念展vol.1モダン百花繚乱『大分世界美術館』」（以下、モダン百花繚乱展）に関連するワークショップ＆レクチャーとして、モダン百花繚乱展の出品作家である中上清氏と松本陽子氏、アトリウム「ユーラシアの庭」展示作家である須藤玲子氏を招聘して、ワークショップ＆レクチャーを開催した。さまざまな講座を企画する中、展覧会に出品している作家と触れ合うワークショップやレクチャーは外せないと考えたからだ。今まさに展示されている作品について、作家は何を想い、何を考え、制作をしているのか。そのリアルな生の声を聞くことのできる時間は貴重だ。いずれの講座も内容を作家に一任するのではなく、我々教育普及グループスタッフと一緒に組み立てて実施した。

内なる光を感じるとき～私にとっての光を考える

講師：中上　清（美術家）

光がないとモノの形は見えないし、色も見えない。モノを見るのに大切な“光”をテーマにしたワークショップ＆レクチャーを開催した。講師には光と空間を描く中上清氏。モダン百花繚乱展では途中で展示替えが行われたが、その展示替えした作品を、この講座のために体験学習室で特別展示。作家立会いのもと、通常展示室では近寄れない距離で作品に迫る。そして中上氏が過去に制作していた「光が生まれる瞬間」を体験するため、同じ制作方法を試した。これは画材を独自に研究した中上氏オリジナルの方法である。展示室でも作品制作の秘密に触れつつ、たっぷり作品を視た贅沢な講座となった。

まるごと松本陽子 3つのプログラム

講師：松本陽子（美術家）

「手を動かす」「作家のことを知る」「作品を見る」。作家や抽象絵画の深部に迫ることを目的に、参加者は自由にコースを選択できる。「ワークショップ 想像と創造ーおおいた魚づくしの巻」は子供から大人までを対象に、魚をモチーフにした絵を描いたり立体をつくったりした。「レクチャー 画家松本陽子が描くものーかたちのその先へ」では松本氏の過去から現在までの作品を見ながら、具象・抽象絵画という枠にとらわれない制作についての話を聞いた。「ギャラリーツアー松本陽子とめぐる百花繚乱イマジナリーツアー」は、作家と展覧会を巡るギャラリーツアー。松本氏はさまざまな作品を前に、ただひたすら「いいわね」の連発。その自由に作品を感じる空気は、参加者のみならず、一般の来館者にも伝わっていく。一緒に作品を視るという、我々教育普及グループが目指す理想的なギャラリーツアーとなった。

須藤玲子 テキスタイル・ワークショップ

講師：須藤玲子（テキスタイルデザイナー）

さまざまなテキスタイルの魅力に触れるため2つのコースを開催。「布は友達～つぎつぎパッチを首に巻く」は、須藤玲子氏が今までデザインした布を縫い合わせ、自分だけのストールをつくる。20×20cmの布がテーブルいっぱいに並べられると目を丸くする参加者たち。ここから一人7枚選ぶのだが、どれもこれも魅力的でなかなか選べない。4時間後、世界で1枚しかないストールが20本完成した。「眠らない錆～写し出されるイロ・カタチ」は鉄を並べた上に布を置き、ビニールで包んで一晩放置するだけで、鉄板のシルエットが転写されるという不思議なワークショップだ。本当にそれだけでできるのか、不安と期待が混じった参加者だったが、翌日ビニールを開けるときれいな錆の形が写し取られていた。世界で唯一の布が風になびく様に、みんな大満足だった。

ワークショップができるまで

[探検し、面白いものを探す]

私たちはワークショップに向けて調査や実験に取り組んでいます。調査や実験というと難しそうですが、実は探検し、面白いものを探しているのです。その中には、すでにワークショップとなり、皆さんと一緒に楽しんだものもあれば、まだお楽しみにとっているものもあります。ここでは、その一部をご紹介します。

私たちは絵の具のもとになる石や土、染料となる植物を大分県内から集めています。河原を歩いて見つけたきれいな色の石もあれば、ピカピカと光り、砕くと真っ赤な粉（顔料）になる石もあります。気合いを入れて鉱山跡周辺を探して見つけた水晶のついた石はちょっとした自慢です。山を歩くとついつい拾ってしまうドングリも茶色い染料になります。赤い染料のもとになる日本茜の根っこは、ハート型の葉っぱを目印にひたすら掘りました。石や他の植物の根の間をぬうように生えた根っこを切らないように、そっと掘り進めるのは至難の技でした。

ワークショップで大分市外の小中学校を訪問した時は、各地域を知る絶好のチャンスです。生徒や先生に学校付近の面白いものの話を聞いたり、周りの景色をよく見たりして情報をたくわえます。道中にその時期にしかとれない木の実などを見つけた時は、車をとめ、採取します。たくわえた情報をふまえて、また山や川へ向かいます。こうして集めた色の原料は加工して教材ボックスに収められ、レクチャーやワークショップで使用しています。

山に分け入り採取するほかに、生産者の方にいただいたり、栽培方法を教えていただくものもあります。竹田市には布や糸を紫色に染める紫根を育てている地域があります。色の濃い根が取れる最も良い時期に、私たちも紫根染めをさせていただいたり、紫根の一部をわけていただいたりしました。その紫根は乾燥させて瓶に入れ、教材ボックスに収まっています。他にも、真珠の養殖場を見学させてもらい、真珠を養殖するアコヤガイの殻や真珠をわけていただきました。これも絵の具のもととなる炭酸カルシウムと同じ成分ということで、教材ボックスで紹介しています。

大分を飛び出し調査することもあります。ある時は、京都の宇治にある日本画の絵の具を作っている「ナカガワ胡粉絵具株式会社」へ見学に伺いました。教材ボックスに収納されている日本画の絵の具は、ほとんどがこちらの会社のものです。会社名にもなっている「胡粉」は日本画に使用される白い絵の具です。貝殻を細かくすりつぶしてつくりますが、その加工法を見せていただきました。使用されるイタボガキの殻は、工場から道路を隔てた敷地に山積みされていました。10～15年かけて風雨にさらし風化させた後に細かな粉になるまですりつぶすのです。動力は水力から電力に変わっているものの、今でも石臼を使い、作業工程には手作業も多く含まれる、丁寧で時間をかけたつくり方には驚きました。

[こつこつ準備する]

ワークショップのためには、地道にこつこつと準備も行います。ある時は幼稚園生180人で遊ぶ竹を、山から切り出し、用意しました。山で枝を落とし、車に積めるだけの長さに切って持ち帰り、ひたすら手頃なサイズに切りそろえました。薄い輪切り、長め、細めを織り交ぜて切り、ささくれで手を傷めないよう角はすべて磨きました。ワークショップ当日、転がす、叩く、重ねる、並べる、連結するなどして遊ぶと、準備に時間も体力も使って大量の竹を用意しただけあって、私たちが想像もしなかった遊びが園児によって次々と生みだされました。

10m四方の大きな布を作るため、ミシンでひたすら縫ったこともありました。体育館などで広げて遊ぶためです。布は、はらんだ空気を逃がさないので、みんなでドーム状に膨らませて中に入ることができます。息を合わせて手を離すと頭上高くに浮遊します。子供向けの遊びに思われがちですが、これまでにない感覚が体験できるので大人にも人気です。布の動きがふわふわもこもこしているので、私たちは「ふわもこ」と呼んでいます。これは長さ10m、幅150cmの布を6枚、家庭用ミシンで縫い合わせて作りました。直線距離にして50m。半ば意地の作業でしたが、これを使って遊んだ子供の中にはお母さんに「これ欲しい」とねだる子もいて、根性で縫った甲斐があったと思っています。

当館は竹工芸作品を多数所蔵しており、それに合わせて教材ボックスには竹材見本や制作に使用する道具も含まれています。竹材の中には、私たちの手で切りに行き、油抜きといって青い竹から蝋脂分を抜き、乾燥させたものもあります。道具を実際に使って竹を割り、ヒゴを作る練習も始めました。竹工芸に近づこうと始めましたが、コレクションの展示作業を手伝い、作品に触れるたび、その技術の高さに、近づくよりも遠のいてしまったと感じる昨今です。材料も、道具も、技術も、すぐにとはいきませんが、少しずつ積み上げていこうとしています。

[一緒になって、考える]

ワークショップでは私たち教育普及のスタッフ自らが講師をするだけでなく、さまざまな分野の方を講師としてお迎えすることもあります。その時は講師の方にすべてお任せではなく、私たちもプログラムを一緒に考え、準備をします。

モダン百花繚乱展の出品作家、中上清さんにお願いした時は、中上さんがある年代まで用いていた特殊な描き方に、ワークショップで取り組むことにしました。黒い画面に金色の絵の具が浮かびあがる、というものです。他の誰もしていない、インターネットにも画法本にも記載されていない技法だったので、アトリエへ直接伺い、使用する画材や絵の具の調合を教わり、実際にお手本となる作業も見せていただきました。そこまでしたにも関わらず、美術館に戻ってやってみるとうまくいきません。金が浮かび上がるところか、すべて落ちてしまうのです。絵の具の配分を間違えたのか、手の動かし方が悪いのか、と思い、いろいろやってみましたが、時間ばかりが過ぎ、とうとうワークショップ前日に中上さんが大分へいらっしゃるまで原因はわからずじまいでした。中上さんと一緒に、ああでもない、こうでもないと何度か試した後、「うん、これでいけると思うよ」と、絵の具にじょぼじょぼ大量の水を注ぎ置き、顔料（色の粉）が沈殿したところで、メディウム（顔料を画面にくっつける役割をはたすもの）が大量に溶けた水を捨て、画面にくっつきづらい絵の具をつくりました。それを使うと見事に金は浮き上がったのです。

ワークショップ当日はこの絵の具づくりも行い、通常では考えられない使い方に目を丸くしていた参加者の皆さん。「身近に手に入る素材を面白く使えて楽しかった」「実際に自分で制作し、中上さんの材料やマチエール作りに対する姿勢がよくわかった」という感想からもうかがえるように、参加者、特に美術を専攻する高校生は多いに刺激を受けたようでした。

身体のワークショップ「ワタシと向き合う」では舞踏家の菊地びよさんに講師をお願いしました。準備を進める中、竹林で踊る映像を撮らせていただき、その映像を使ってワークショップ参加者を募りました。そして参加者が動く時に気持ちを盛り上げるために流す音楽や映像も一緒に用意しました。映像は呼吸音と細胞の画像を組み合わて作りましたが、音楽も映像も、いざ美術館で流してみるとなんだかしっくりきません。存在感が強すぎて場の雰囲気が壊れてしまうように感じ、結局使わないことに決めました。実際、菊地さんの丁寧な導入で参加者の心を引き込むと、音楽も映像も必要としませんでした。使わなかった音楽と映像は、今後他のワークショップで使用したいと思います。

また、コンテンポラリーダンスカンパニー86B210のお2人と身体のワークショップ第2弾「バンブーボディ」を行いました。竹で作った教材、たけびょんとりんこちゃんを使って、竹のしなりや反動を感じながら身体を動かしたり、それらを組み合わせて構造物を作った中で身体を動かすワークショップです。一緒にプログラムを考えている時間はとても面白く、私自身が参加者の誰よりワークショップを心待ちにしていると、いつも思います。

[身近すぎて気づいていない面白さを提案する]

私は大分に生まれ育ちましたが、高校生のころは大分なんて田舎で何もない所だと感じ、大分から出ることばかりを考えていました。今となっては、何もない所なんてあるわけがない、なかったのは私の見る目だったなぁ、という思いです。確かに大分にはないものもありますが、大分にしかないものもあります。それは地域の魅力についてもそうですが、身近な毎日の生活の中においても言えることです。当たり前過ぎて気づいていないけど、面白いもの。そういうものを探して面白さを提案するのがワークショップの大きな役割の一つであるように思います。

最近は、公開ラボラトリーといって、教材ボックスに収める教材をつくる様子を公開する活動も始めました。植物で布を染めたり、砕いた石の粉（顔料）を電気コンロで炒ってみたり、訪れた方と一緒につくることもあります。訪れる方の中には、ワークショップに普段から参加されていて教材ボックスに親しんでいる方もいれば、ふらっと立ち寄る方もいます。一緒に面白いものを探しながら活動しています。

土曜日に行っている体感型のワークショップに来る1歳の参加者は、夏前まではバギーに乗っていましたが、秋にはしっかり歩いて誰よりも先頭を切ってアトリエへ来てくれるようになりました。同じく、まだほとんど喋れなかったのに、今では挨拶をしてくれる3歳の参加者もいます。毎週末、庭で遊ぶように美術館にやってくる4歳から中学1年生まで4人の参加者は、私よりも展示室や美術館そのものを楽しんでいるんじゃないかと思うほどです。彼らが大きくなって一緒に山や川へ行き、いろいろなものを採って教材ボックスに入れたり、ワークショップを考えたりすることができたら、どんなに面白いことが広がるかと楽しみにしています。

山本麻代 | Mayo Yamamoto
大分県立美術館 学芸普及課 教育普及グループ 専門員

創作することが好きで、大学ではプロダクトデザイン（工業デザイン）を専攻するも、素材の魅力に触れ、
さまざまな素材の工房を転々と出入りを繰り返す。美術館推進室、芸術会館を経てOPAMへ。
進学で大学を出るまでは気づかなかった地元の面白さに、今は夢中になっている。自他ともにキツネに似ていると認める。